上越教育大学研究紀要　第37巻第１号　平成29年９月
Bull. Joetsu Univ. Educ., Vol. 37(1), Sep. 2017

幼児期に求められる指導内容についての保育者と小学校教員の考えの相違

白　神　敬　介*・周　東　和　好**・吉　澤　千　夏***・角　谷　詩　織*

（平成29年２月28日受付；平成29年４月19日受理）

要　　旨

本研究では，保育者及び小学校教員によって意識されている幼児期に指導すべき具体的な内容を明らかにすることを通して，保幼小連携を推進するための手がかりを探ることを目的とした。これにより，長期的，継続的な取り組みである保幼小連携において，さまざまな保育・教育歴をもつ保育者・教員の考えを十分に共有し，連携するための知見を得ることができると考えられる。調査内容として，幼児期の教育内容，生活の自立，運動・健康面の３つの側面を中心に検討を行い，保育・教育年数との関連性についても分析を行った。結果より，幼児期における小学校への接続を意識した働きかけの必要性が保育者と小学校教員において共通の認識として存在していること，教育観における教科の側面が強い指導内容では保育者と小学校教員における考えの違いが大きいことが示された。また，幼児期に必要な指導内容への考えと保育・教育歴との関連性については，勤務校種によって異なる傾向がみられた。このことから，保幼小連携の推進において，幼児期に求められる指導内容についての保育者と教員の考えの相違とともに，そのような考え方の形成プロセスを含めた検討の必要性が示唆された。

KEY WORDS
cooperation of nursery, kindergarten, elementary school 保幼小連携　first-grade problems 小１プロブレム
teaching contents 指導内容　teaching professional background 教員歴　childcare workers 保育者

1　問題と目的

近年，保育所・幼稚園と小学校との連携，いわゆる，保幼小連携に関する研究が盛んに行われている。その背景の一つに，保育所・幼稚園から小学校に上がってきた小学校１年生が，小学校生活になじめずに授業中に騒いだり，動き回ったりするという「小１プロブレム」の問題があると指摘されている(1)。「小１プロブレム」の解決には，保育者（保育士および幼稚園教諭）と小学校教員が連携し，この問題に取り組んでいく必要がある。なぜなら，子どもは保育所・幼稚園から小学校に上がる際，様々な環境の変化に対応していくことが求められるためである。

保育所・幼稚園と小学校の環境の違いとして，保育士および幼稚園教諭と小学校教員の援助・指導における考え方や，子どもへの理解や期待に違いがあると考えられる。たとえば，学校への接続を意識して年長児への直接的指導を行う幼稚園教諭に比べ，小学校教諭は，小学校に入学したばかりの子どもに配慮して，子どものペースを重視した間接的な指導を行い，この違いに戸惑った1年生が小学校での活動に困難を示していた(2)。また，クラスで不適応状態にある子どもへの認識において，幼稚園教諭と小学校教員では捉え方に相違がみられた(3)。一方で，保育者と小学校教員は幼児期の子どもに習得してもらいたい能力として「学習・生活規律」や「良好な対人関係」に共通のニーズを抱えている(4)が，小学校教員には，入学前の子どもに教科の素地となる能力を身につけることを期待するものが一定数存在する(5)ことが示されている。

このような考えの違いがあるがゆえに，保育者と小学校教員の相互理解を図っていくことが必要であるが，必ずしも十分な相互理解や情報交換が図られているわけではない。特に保育者において「幼保と小の教員が相互に相手の園・学校の生活を理解していない」と感じているといった報告(6)や，保幼小を貫く教育課程の流れや，保幼小の指導，援助等に関わる共通理解については未だ不十分(7)であると指摘されている。保幼小連携への積極性についても保育者と小学校教員で「温度差」があり，保幼小連携への実践内容や活動成果に対する認識に違いを生んでいる(4)。

これらの研究で示されたように，保育者と小学校教員は幼児期の子どもへの指導の方法や内容に考えの違いをもち，そのことが保幼小連携の実施に影響を及ぼしていると考えられる。保幼小連携において，保育者と小学校教員が互いの子どもへの接し方や考え方を共有し，相互理解を進めていくことが必要である。そして，保育者と小学校教員

*学校教育学系　**芸術・体育教育学系　***自然・生活教育学系

の相互理解のためには，それぞれの指導内容や教育観について理解することが求められる。特に，子どもにどのような成長や学びを期待するのかといった教育観については，保育所や幼稚園，小学校で考えの違いが存在していることを前提として，その違いを踏まえた連携を模索していく必要がある。

そこで本研究では，上記を踏まえ，保育者及び小学校教員によって意識されている幼児期に指導すべき具体的な内容を明らかにすることを通して，保幼小連携を推進するための手がかりを探ることを目的とする。具体的には，保育・幼児教育と小学校教育の連携が目指されている現在，幼児期の教育において保育者・教員が必要と考える指導・活動内容について，幼児期の教育内容，生活の自立，運動・健康面の３つの側面を中心に検討を行う。幼児期の教育内容，生活の自立，運動・健康面のそれぞれの側面は，遊びや生活体験を中心とした幼児期から小学校教育以降の教科の学習への基礎となりうるものである。ゆえに，幼児期から小学校低学年の時期にわたる幼年期の生活において，「生活」・「遊び」と「教科」をいかにしてつなぐのかという実践的な課題を検討する上で，これらの側面に注目し，保育者・小学校教員の考えの相違を捉えることが重要であると考えられる。

また，指導内容についての考え方は，これまでの保育・教育経験が影響していることが予想されるため，保育・教育年数との関連性についても検討を行う。これにより，長期的，継続的な取り組みである保幼小連携において，さまざまな保育・教育歴をもつ保育者・教員の考えを十分に共有し，連携するための知見を得ることができると考えられる。

2　方法

2．1　調査対象

保育士，幼稚園教諭，小学校教員としての勤務経験を持つものとした。

2．2　調査手続き

保育士研修会および教員研修会の場において，参加者を対象に任意のアンケート調査を行った。研修会は三回あり，それぞれ2015年３月，７月，９月に実施されたものであった。あらかじめ参加者に調査の主旨について説明し，任意による協力を求めた。協力者にはアンケートを配布し，その場での記入と提出を依頼した。回答者が特定できないよう調査票は無記名とした。すべての研修参加者から回答が得られ，中学校または高校に勤務する者を除いた80名を分析対象とした。

2．3　調査項目

調査にあたっては，幼児期の教育において意識されている指導内容を捉えるために，調査対象者の属性に関する質問および幼児期の子どもに必要な指導内容として，各専門家による検討のもと，教育観（項目１～12），生活の自立（項目13～18），運動・健康指導（項目19～27）に関する質問（計27項目）からなる調査紙を作成した（表１）。回答は，「小学校以降の子どもの適応的な発達を促すために，幼児期の教育において，以下のこと（27項目）は，どの程度必要だと思いますか。あてはまる数字に一つだけ〇をつけてください。」という問いに対して，４段階（１．全く必要ない，２．あまり必要ない，３．必要，４．とても必要）での評定を求めた。

2．4　分析

分析にあたっては，27項目からなる調査項目それぞれを対象者の属性ごとに平均値を算出し，分散分析を行ったうえでTukey法による多重比較を行った。

それぞれの質問項目について，「とても必要」に４点，「必要」に３点，「あまり必要ではない」に２点，「必要ではない」に１点を付与し，分析を行った。統計解析には，IBM SPSS Statistics 23（SPSS社）を使用し，有意水準を５％とした。

3　結果

3．1　回収率・回答者の属性

80名から回答が得られた。回答者の性別分布は，男性が11名（13.8%），女性が69名（86.3%）であった。回答者の勤務校種の分布は，保育所が31名（37.8%），幼稚園が35名（42.7%），小学校が14名（17.1%），であった。保育・教育歴の平均は13.3年（SD=10.4）であり，最大値が39年，最小値は４か月であった。職種ごとの保育・教育歴につ

いては，保育所で平均15.8年（SD=7.8），最大値が31年，最小値が２年，幼稚園で平均10.2年（SD=12.0），最大値が39年，最小値が４か月，小学校で平均9.1年（SD=9.3），最大値が29年，最小値が１年であった。

３．２　幼児期の子どもに必要な指導内容についての職種による比較

幼児期に必要な指導内容の27項目に関する回答の平均値を表１に示した。本調査における全体的な傾向として，多くの項目が全体平均値で３点以上を示しており，保育者・教員は多くの指導内容を幼児期に「必要」と認識していた。また，特に必要性が高いと認識されている項目は，「1．外で身体を動かして遊ぶ。」「2．草花，生き物など，自然と親しむ。」「４．絵本の読み聞かせを行う。」「15．衣服の着脱が一人で出来る。」「17．遊んだ後の片づけができる。」という内容であった。一方，幼児期の指導内容として必要性が低いと認識されていた項目は，「3．英会話を習う。」「19．とび箱で開脚とびができる。」「20．鉄棒で逆上がりができる。」「5．平仮名の書き方を教える。」「14．お腹が空いたら，食べたいものを自分で用意できる。」という内容であった。

勤務校種を説明変数として幼児期に必要な指導内容の27項目のそれぞれを従属変数とした一要因分散分析を行った（表１）。分散分析で有意差がみられた項目に対してTukey法による多重比較の結果，勤務校種ごとの平均値の差が示された。多重比較の結果を整理すると，保育所・幼稚園よりも小学校で平均値が高い傾向が示されたのは「3．英会話を習う。」「5．平仮名の書き方を教える。」「23．仲間と協力して運動用具を準備することができる。」の３項目であった。小学校よりも保育所もしくは幼稚園で平均値が高い傾向が示されたのは「7．歌を歌う機会を与える。」「12．友だちとのトラブルを経験する。」「15．衣服の着脱が一人で出来る。」の３項目であった。保育所よりも幼稚園で平均値が高い傾向が示されたのは「11．子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。」「12．友だちとのトラブルを経験する。」「16．気温や天候に合わせて，衣服の着脱が自分で出来る。」「18．身の回りの空間等を自分が心地よい状態にできる。」「21．用具，遊具を用いて，あるいは用具なしで，様々な動きができる。」「23．仲間と協力して運動用具を準備することができる。」の６項目であった。

３．３　保育・教育歴による回答傾向の分析

幼児期に必要な指導内容の回答傾向と，保育・教育歴との関連性を検討した。なお，保育士歴と教員歴がそれぞれ記載されていた場合は，それらを合算したうえで分析を行った。保育・教育歴の年数と各項目についてPearsonの相関係数を分析したところ，いずれの項目においても有意な結果は得られなかった。

さらに，職種ごとに幼児期に必要な指導内容の回答傾向と，保育・教育歴との相関係数を算出したところ，いくつかの項目で有意な関連が示された。有意な相関係数が見られたのは，保育所では，「11．子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。」（$r=-0.40$，$p<0.05$），「12．友だちとのトラブルを経験する。」（$r=-0.42$，$p<0.05$），「14．お腹が空いたら，食べたいものを自分で用意できる。」（$r=-0.42$，$p<0.05$）であった。幼稚園では，「19．とび箱で開脚とびができる。」（$r=-0.41$，$p<0.05$），「21．用具，遊具を用いて，あるいは用具なしで，様々な動きができる。」（$r=0.40$，$p<0.05$）であった。小学校では，「10．できる限り大人（保育者や親）が指示を出さないような関わり方をする。」（$r=-0.57$，$p<0.05$）であった。

４　考察

４．１　保育者と小学校教員の考えの相違

本調査結果より，質問項目の多数が全体平均値として３点以上を示しており，本調査で取り上げた項目の多くが幼児期の子どもに必要な指導内容として保育者・小学校教員の双方に認識されていることが示された。一方で，「3．英会話を習う。」「19．とび箱で開脚とびができる。」「20．鉄棒で逆上がりができる。」の項目については，全体平均値が2.5点よりも低く，これらの項目は幼児期においては「あまり必要ではない」と認識されている傾向が示された。

幼児期に必要な指導内容について，保育者と小学校教員の認識の違いが表れた内容は，英会話の練習，平仮名の練習，または歌を歌う機会や友達とのトラブルの経験，衣服の着脱等であった。このなかで，英会話の練習については，分析結果から，保育所よりも小学校の方が比較的必要性を高く認識していることが確認されたものの，小学校の平均得点のなかで最も低い得点の項目となっており，幼児期に必要な指導内容としての認識は小さいといえる。また，平仮名の練習については，保育者に比べ小学校教員において必要性の認識が高く，小学校教育の下準備として，幼児期での指導内容として小学校教員が具体的に求めている内容の一つであるといえる。平仮名の練習について保育者の必要性の認識は低く，保幼小連携を考えるうえでは，このような小学校教員の期待が存在することについて保育者側の理解が重要であろう。着脱衣の習慣を身につけるといった生活規律の獲得については，先行研究では保育者は

小学校教員からの期待が大きいと考えていると報告されていた[8]が，本調査においてはむしろ小学校教員の方が幼稚園教諭よりも衣服の着脱に関する必要性の認識は低いという結果であった。また，歌を歌う機会を与えることや，友達とのトラブルを経験することについて，幼稚園教諭は高い必要性を認識していたが，小学校教員からは必要性の認識が比較的低かった。このことは，幼児期における音楽活動やトラブルの経験の重要性が小学校教員からはあまり理解されていないことを示唆するものであり，こうした活動が幼児期の子どもの発達に果たす意味について積極的な情報発信を図る必要性が考えられる。

表１．幼児期の子どもに必要な指導内容についての回答分析結果

	平均値				分析結果		
	全体	保育所	幼稚園	小学校	F値	p値	多重比較
1．外で身体を動かして遊ぶ。	3.98	4.00	3.97	3.93	1.01	0.37	
2．草花，生き物など，自然と親しむ。	3.91	3.90	3.97	3.79	2.23	0.11	
3．英会話を習う。	2.09	1.90	2.11	2.36	3.15	$p < 0.05$	保 < 小
4．絵本の読み聞かせを行う。	3.90	3.90	3.97	3.79	2.23	0.11	
5．平仮名の書き方を教える。	2.54	2.45	2.29	3.21	11.63	$p < 0.01$	保 < 小，幼 < 小
6．絵を描く機会を与える。	3.68	3.71	3.74	3.57	0.70	0.50	
7．歌を歌う機会を与える。	3.79	3.81	3.89	3.57	3.23	$p < 0.05$	幼 > 小
8．一定時間きちんと席に着いていられるように訓練する。	3.21	3.32	3.09	3.21	1.12	0.33	
9．手の届くところに触りたいものがあっても我慢させるなど，敢えて我慢する機会を設けて指導する。	2.83	2.80	2.86	2.79	0.08	0.92	
10．できる限り大人（保育者や親）が指示を出さないような関わり方をする。	3.09	3.03	3.14	3.08	0.36	0.70	
11．子どもの考えを反映させることができる機会を設ける。	3.68	3.55	3.83	3.54	3.74	$p < 0.05$	保 < 幼
12．友だちとのトラブルを経験する。	3.76	3.65	3.94	3.50	7.76	$p < 0.01$	保 < 幼，幼 > 小
13．食具等を正しく使って食べることができる。	3.61	3.52	3.66	3.79	1.64	0.20	
14．お腹が空いたら，食べたいものを自分で用意できる。	2.65	2.55	2.69	2.69	0.45	0.64	
15．衣服の着脱が一人でできる。	3.84	3.87	3.94	3.64	3.29	$p < 0.05$	幼 > 小
16．気温や天候に合わせて，衣服の着脱が自分でできる。	3.65	3.48	3.83	3.71	4.34	$p < 0.05$	保 < 幼
17．遊んだ後の片付けができる。	3.83	3.77	3.91	3.86	1.26	0.29	
18．身の回りの空間等を自分が心地よい状態にできる。	3.33	3.10	3.54	3.36	4.74	$p < 0.05$	保 < 幼
19．とび箱で開脚とびができる。	2.30	2.19	2.23	2.62	2.60	0.08	
20．鉄棒で逆上がりができる。	2.43	2.45	2.31	2.57	1.07	0.35	
21．用具，遊具を用いて，あるいは用具なしで，様々な動きができる。	3.37	3.19	3.54	3.36	3.41	$p < 0.05$	保 < 幼
22．遊具での順番待ちをすることができる。	3.73	3.71	3.80	3.71	0.40	0.67	
23．仲間と協力して運動用具を準備することができる。	3.52	3.29	3.69	3.71	5.74	$p < 0.01$	保 < 幼，保 < 小
24．鬼遊びやスポーツのルールを理解して，ゲームすることができる。	3.65	3.58	3.80	3.50	2.87	0.06	
25．遊びに没頭する。	3.80	3.74	3.83	3.93	0.98	0.38	
26．屋外での集合の際，きちんと整列できるように訓練する。	3.22	3.16	3.34	3.15	1.15	0.32	
27．椅子に座る姿勢を良くするように指導する。	3.31	3.23	3.34	3.46	1.13	0.33	

４．２　教育観，生活の自立，運動・健康指導の視点からの保育者・小学校教員の考えの理解

保育者と小学校教員のそれぞれが考える幼児期の子どもに必要な指導内容について，教育観，生活の自立，運動・健康指導のそれぞれの側面から整理を行う。

まず，教育観に関する項目のなかで，英会話や平仮名の習得といった教科学習の側面が強くなると考えられるものや，歌を歌う，絵を描くといった表現活動への必要性に対して保育者と小学校教員に考えの違いがみられた。一方で，席に座れる訓練を行うことや，我慢する機会を設けること，といった教育的指導に関する必要性については保育者と小学校教員で相違はほとんどみられなかった。このことは，幼児期においても小学校への接続を意識した働きかけの必要性が保育者と小学校教員において共通の認識として存在していることを示唆するものである。

生活の自立に関して，保育者・教員はともに一定の必要性を認識しているものの，行動を伴う心的な自立に比べ，身辺生活の基本的な自立の方がより「必要である」と考えられていた。さらに，その傾向は保育者と小学校教員間での違いは認められなかった。このことは，幼児期の子どもの生活の自立に関する意識において，勤務校種に関わらず「身辺生活の自立」に重きが置かれていることを意味している。この結果から，勤務校種を問わず，保育者・教員による幼児期の発達段階の理解がある程度なされていると見ることができる。

運動・健康面に関しては，保育者・小学校教員ともに技能ならびに社会的行動規範については必要性が高く認識されているものの，「開脚とび」「逆上がり」といった技能面の具体的な技の習得に関する必要性は，他の質問項目に比較して低く認識されていた。また，動きの習得という技能に関する指導内容よりも，社会的行動規範に関する指導内容に関する必要性が高く認識されていた。また，「遊びへの没頭」という情意面も高く認識されていた。ここから，運動・健康指導の側面から幼児期の教育への意識を検討した場合，技能よりも社会的行動規範や情意に保育者・教員の意識が向けられていることが示唆される。

教育観，生活の自立，運動・健康指導の視点から保育者と小学校教員の考えの異同を整理すると，ある程度の共通認識が存在することが示唆された。このことは保幼小連携において重要な結果であるといえる。一方で，教育観における教科の側面が強い指導の内容においては，保育者と小学校教員における考えの違いが大きく，この違いをどのように共有していくかが課題であるといえる。

４．３　保育・教育歴と幼児期に必要な指導との関連

勤務校種別に見た際に，指導内容についての考えと保育・教育歴との関連が見られたことは，勤務校種ごとに経験とともに変化する考え方がそれぞれに存在していることを示唆している。保育士では，経験年数を重ねることによって，子どもの考えを反映する機会を設けることや，友達とのトラブルを経験することの必要性の考えは縮小していくことが示された。これは，子ども同士の関わりの実際を何度も経験することによって，保育士が積極的に関わらずとも，子どもが自分の考えを表す姿が見られることや，必ずしも子ども同士のトラブルによる経験が子どもにとって望ましい状況になるわけでないことを理解するようになったためといった解釈が可能である。また，小学校では，できる限り大人が指示を出さないようにする関わり方の必要性について，教育歴が長くなるほど小さく感じるようになった。このことは，教員としての初期においては指示を出さない関わりが望ましいという考えをもちながら，実際の小学校の場面を経験するなかで，指示をより強く認識するようになったと考えられる。幼稚園では，経験年数とともにとび箱で開脚とびができるようになることの必要性を小さく感じるようになる一方で，様々な動きができるようになる必要性を強く感じるようになっていた。幼稚園教諭は，教員としての初期においては小学校への接続を意識したような特定の運動能力の必要性を強く感じるが，経験を重ねることで，特定の運動能力よりも遊びや運動能力の基礎となる様々な動きの必要性をより強く感じるようになるのかもしれない。

こうした勤務校種ごとの経験年数による考え方の違いは，それぞれが保育・教育歴を重ねるなかで，勤務校・園が置かれている状況や時代のニーズからの影響を受けていることが考えられる。こうした勤務校種ごとにみられる保育者・教員の価値観の変遷は，その個人のキャリア形成につながっている。保育所，幼稚園，小学校のそれぞれの保育者・教員としての育ちにおいて，異なった価値観の形成プロセスが存在している可能性がある。保幼小連携は長期的な取り組みのなかで進められていくものである。そのため，保幼小連携を担う保育者・教員のキャリア形成を踏まえた考えの違いにも目をむけ，職種の違いとともにそれぞれの保育・教育歴に応じた考え方の違いや，その違いの形成プロセスにも注目することが必要だと考えられる。

４．４　本研究の意義と限界

本調査結果は，調査対象者の「意識」に関するものである。幼児教育に必要な指導内容について，保育者と小学校教員の意識を具体的に検討したことにより，保幼小連携の推進における考え方のずれといった意識化しにくい問題を

自覚的に捉える手がかりを得たといえる。今後は，その「意識」がどのように「かかわりや指導」と結びつき，幼児期の子どもたちの育ちを支えているのか，より詳細な検討が必要である。また，それらが保幼小連携の推進においてどのような影響を及ぼしているのかについて実証的な分析が求められる。本研究の課題として，性差の検討が不十分である点が挙げられる。本研究の回答者のなかで，保育者は大半が女性で構成されている一方，小学校教員のなかで女性が占める割合は約半数であった。この性比率の偏りが，職種ごとの回答傾向の違いとして現れた可能性がある。本研究ではサンプルサイズの問題により，性差や年齢層に基づいた違いを十分に考慮した分析が困難であったため，今後，これらの要因を考慮したデータ収集と分析が必要であると考えられる。

引用文献

(1) 酒井　朗.(2003)．幼小連携の課題を考える．*初等教育資料*，10月号，68-71．

(2) 菊池知美．(2008)．幼稚園から小学校への移行に関する子どもと生態環境の相互調節過程の分析：移行期に問題行動が生じやすい子どもの追跡調査．*発達心理学研究*，**19**，25-35

(3) 小林小夜子．(2003)．幼稚園・保育所・小学校における不適応児のとらえ方に対する指導者間比較．*保育学研究*，**41**，32-39．

(4) 緩利　誠・名倉一美．(2011)．幼稚園・保育所・小学校連携における幼児教育への期待と課題．浜松学院大学研究論集，**8**，125-139．

(5) 木山徹哉・山田英俊・中山智哉・小林久美・長谷川勝久・白瀬浩司・柳　昌子．(2007)．新入児童の状況と保・幼・小連携の課題：福岡県行橋市の小学校教員を対象とした質問紙調査の分析を中心に．*九州女子大学紀要．人文・社会科学編*，**44**，31-49．

(6) 丹羽さがの・酒井　朗・藤江康彦．(2004)．幼稚園，保育所，小学校教諭と保護者の意識調査：よりよい幼保小連携に向けて．*お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要*，**2**，39-50．

(7) 加藤美帆・高濱裕子・酒井　朗・本山方子・天ヶ瀬正博．(2011)．幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か．*お茶の水女子大学人文科学研究*，**7**，87-98．

(8) 木山徹哉・中山智哉・小林久美・平山静男・白瀬浩司・長谷川勝久・山田英俊・柳　昌子．(2008)．保育者の年長児に対する現状認識と保・幼・小連携への対応：質問紙調査の分析を中心に．*九州女子大学紀要．人文・社会科学編*，**45**，35-57．

Differences in the Teaching Contents of Nursery, Kindergarten, and Elementary School Teachers.

Keisuke SHIRAGA* · Kazuyoshi SHUTO** · Chinatsu YOSHIZAWA*** · Shiori SUMIYA*

ABSTRACT

Clarifying the differences between nursery, kindergarten, and elementary school teachers will offer useful clues for promoting cooperation among nursery schools, kindergartens, and elementary schools. The purpose of this study was to clarify the education contents at early childhood required by nursery and kindergarten teachers and elementary school teachers. We conducted a questionnaire survey with childcare workers and elementary school teachers on their viewpoints on educational content in early childhood, autonomy of life, exercise, and health, along with professional teaching background. Childcare workers and elementary school teachers commonly recognized the necessity of connecting elementary school and early childhood education. However, elementary school teachers felt the necessity of subjective teaching contents more strongly. In addition, the relationship between required teaching content and teaching professional background differed for teachers in each type of school.

* School Education ** Music, Fine Arts and Physical Education *** Natural and Living Science